

灘神戸生活協同組合副組合長
兵庫県生活協同組合連合会第五代会長

涌井 安太郎

協同組合の星を目指して
歩み続けた神戸の宮城人

【わくい やすたろう】

-
- 1909(明治42)年 8月5日、仙台市に生まれる
 - 1927(昭和2)年 仙台商業学校卒業
 - 1935(昭和10)年 神戸消費組合に奉職
 - 1944(昭和19)年 神戸消費組合を一時退職、兵庫県食糧営団に勤務
 - 1945(昭和20)年 神戸消費組合に復職
神戸消費組合専務理事
 - 1950(昭和25)年 神戸生活協同組合専務理事
 - 1960(昭和35)年 国際協同組合同盟第21回大会に
日本代表として出席
 - 1962(昭和37)年 灘神戸生活協同組合専務理事
 - 1972(昭和47)年 灘神戸生活協同組合副組合長
 - 1976(昭和51)年 兵庫県生活協同組合連合会第五代会長
 - 1996(平成8)年 7月19日死去

幼少期のキリスト教との出会い

仙台藩は武士の住むまちに「丁」、町人の住むまちに「町」の字を当て町割りをした。涌井の生家は、その丁と町が交差するところ、北一丁通りと二日町角に面した一画にあり、手広く商業を営んでいた。貸家の店子や町内の人たちが始終寄り集まっていた家で、お抱えの人力車がいたという。すぐ近くにプロテスタント系の教会（現仙台ホサナ教会）があり、涌井家の子どもたちは父親の奨めでみなその教会に通った。

涌井安太郎の弟、勅使河原安夫は「父親は苦勞して身を起こした商人だったが、子どもたちは、それぞれの好きなように開放的に育てるといふ教育方針だった」と話す。涌井は立川文庫を愛読し、二宮金次郎像に勉強の手本を見る、大人しい少年だった。学校からの帰り道、本に読みふけていたら電柱に衝突したとの逸話がある。

そんななか、教会で開かれる日曜学校は、子どもたちに普段とは違う楽しみを提供する場でもあったろう。涌井家の子らは、彼らが「北一番町教会」と呼んだその教会でキリスト教の息吹にふれる。

聖書の言葉や讃美歌は涌井のたましいにどう響いたか。この幼少期の体験がやがて涌井を生協活動に導くことになるのである。

一生をかけて悔いのない生活と仕事がほしい

涌井は、戦前に神戸で萌芽期の協同組合運動に出会い、以後五六年間の長きに亘って生活協同組合の発展に尽くした。

宮城県内の生協とは講演会など浅い縁でつながるだけだが、涌井が生涯の職場とした灘神戸生協（現生活協同組合コープこうべ）は、日本の地域生協の源流であり、いまも宮城をはじめ全国の生協の目標である。

一人の宮城人が異郷の地でどう人生を全うしたか、涌井と灘神戸生協の歩みに宮城の生協の成立ちを重ねながら筆を進めることとする。

人は道に迷ったとき何を想って人生の決断をするのだろうか。

一九二七（昭和二）年、仙台商業学校（現仙台商業高等学校）を出て東京の貿易商社に就職した涌井は、二〇歳で神戸に赴く。神戸は仙台よりも明るく近代的な都会だったが、次第に郷里の東北と同じようにそこにも貧しく暗い生活があることに気が付き、自分の生き方を模索するようになる。

そしてある日、「少年のころに、仙台のまちで通ったことのあるキリスト教会や日曜学校のことなどがなつかしく、あるあまい期待のようなものをもって」キリスト教会の扉を開けるのである。それは涌井の人生を大きく左右する運命的な出会いだった。

教会に通い始めた涌井は、社会の矛盾に青年らしい純粹さで対峙し、社会的キリスト教運動への参加を通じて思索を深めていく。

その過程で知ったのが賀川豊彦の存在だった。

賀川豊彦はキリスト教の伝道者であると同時に実践的な社会運動家でもあった。貧しい人々の救済活動に全身全霊で取り組み、一九二一（大正一〇）年、灘神戸生協の前身である二つの組織、「神戸購買組合」と「灘購買組合」の設立を支えた。

涌井は、信仰と社会的活動が一体となった賀川のすがたに自分の進むべき道を重ね、工場街に住みこんで子どもたちに勉強を教える日々にひととき安息を見出すが、「一生をかけて悔いのない生活と仕事がほしい」との渴望は消えずにあった。

そんなとき友人から奨められたのが、「神戸消費組合」（神戸購買組合から改称）への参加だった。賀川の活動を通じて消費組合の思想や理論に共感を覚えていた涌井は、思い切って神戸消費組合を訪ねる。

片っぱしから仕事に体当たり

「また病人が来ましたね」。そう言って涌井を迎えたのは、神戸消費組合長の福井捨一だった。病人が来た、とは、身を捨てる覚悟で消費組合運動にたずさわる者、という福井なりの戒めを含んだ歓迎の言葉だった。

こうして昭和一〇年一〇月、涌井は神戸消費組合の一員となる。

神戸消費組合は、賀川豊彦が産みの親、福井捨一が育ての親と言われている。福井は海運業出身の実業家で、神戸の貧民街で苦闘する賀川の活動の支援者でもあった。組合員数約一〇〇〇人、職員一八人で船出した神戸購買組合のかじ取りを担い、大正一三年には「組合の目的は単に生活物資を安く協同購入するだけにとどまらない。もっと広い生活運動、社会運動を目指している」として、組織名を神戸消費組合にあらためた。

また同年七月には、小泉初瀬らの協力のもと、生協における日本最初の女性組織「家庭会」を創設している。女性の地位も発言権も低いなかで、家庭会の誕生は新しい時代の到来を予感させるものだった。

昭和初期、宮城では労働運動として豊里消費組合や仙台消費組合が誕生しているが、いずれも左翼運動の弾圧で短命に終わっている。

世の中が戦時体制へ傾斜していくなか、涌井は組合員拡大運動や機関誌『新家庭』の編集など、本人いわく「片っぱしから仕事に体当たりしていった」。

組合員の求めに応じて米や木炭を入手するため奔走し、朝は朝礼で牧師の代わりに讃美歌と組合歌を合唱して祈りを捧げ、夜は聖書や消費組合の研究会という日々だった。

弟の安夫はこのころ、仙台第二中学校（現仙台第二高校）の一年生二学期から、兄・

安太郎のもとに身を寄せており、涌井の家から近くの兵庫県立第三神戸中学校（現長田高校）に通った。

「兄夫婦は二間ほどの小さな一軒家を借りていました。いつも遅くまで働いていて、夜中に帰ってくると、甘い物買ってきたから食べる」と起こされました。兄嫁の富栄もキリスト教徒でしたから日曜日には連れだって教会へ行き、ほとんど家にいませんでしたね」

一年八ヶ月ぐらいの下宿生活だったが、特別高等警察の家宅捜索に出くわしたこともある。「学校から帰ったら見知らぬ人たちがいる。何だかおかしいぞと思ってとつさに兄貴の日記をカバンに入れて隠しました」。

戦争に向かって突き進む暗い時代を、涌井は神戸消費組合を守り抜くため懸命に働きました。

歯をくいしばりながら神戸生協再建に取り組む

終戦後、郷里に疎開していた涌井のもとへある日電報が届いた。神戸からだった。

「ショウヒクミアイ サイケンスル スグライシンマツ」

仲間が自分の帰りを待っている。涌井は家族を連れてふたたび神戸の地に降り立つ。

目の前には空襲で焼け野原と化したまち、連なる闇市、食糧を求めて歩き回る人の群れがあった。戦争の傷跡に、涌井は「生活を再組織して秩序ある買い出しを行ない、お互いの生活を守らなければ」と痛感する。

昭和二〇年十一月一日、神戸消費組合は小泉秀吉を組合長に、新体制で再出発する。涌井は専務理事として戦後の再建を担うことになった。

しかし戦時中の配給制度や空襲による生活破壊で大きな打撃を受けた組合を再建するのは、並大抵ではない。真つ先に着手したのは食糧の確保だった。サツマイモを探して九州まで足を伸ばしたり、四国まで海産物を買付に出掛けたりした。

また灘購買組合とともに配給統制の壁を乗り越えて青果物や水産物の「荷受け権」の指定を受け、組合員が自ら配給ルートを選べるようにした。

一方で荷受けの事業から発生した組織上の問題が経営危機を招き、昭和二四年には二〇〇〇万円近い欠損金が生じた。

一九四八（昭和二三）年、待望の消費生活協同組合法公布で、神戸消費組合から「神戸生活協同組合」へと改名したが、再建の道は涌井が「その後の一〇年間は、赤字との取り組みだった」と述懐するぐらい険しかった。

社会保険料も固定資産税も滞納したまま。銀行からの借入金は返せず、仕入れ先は無計画に支払手形が乱発されていた。涌井は矢のような催促と攻撃を一手に引き受けて奮闘した。キリキリと胃が痛むような日々だったのではないか。

涌井はのちに、このときのことを「私がいらだつような思いで求めていたのは、「生協再建の」具体的方策であった。→当時の私は満身創痍の姿で神戸生協再建の闘いに取り組んでいた」と振り返っている。

涌井が生協再建に血のにじむような努力をしているころ、宮城では東北大学生協の前身である東北帝国大学生組合（昭和二二年）、県内教職員による宮城県学校生協（昭和二七年）が発足している。弟の安夫は東北帝国大学生だったときに、講義録をガリ版刷りし、組合で販売したという。「紙がないから本が出ない。だから自分たちでガリ版切ってつくったんです」。

当時は大学生協は学生のための、学校生協は教職員のための互助組織で、広く市民に開放されたものではなかった。神戸生協のように家庭の主婦を主役にした組織へと変わるのもう少しあとのことである。

誰かが架け橋の役目を果たさなければならぬ

昭和三七年四月、神戸生協と灘生協（旧灘購買組合）が合併し、組合員四万六千人、供給高三億円の「灘神戸生協」が誕生した。

涌井が合併を意識し始めたのはいつからだろう。

両生協は賀川の指導のもとほぼ同時期に生まれ、競い合いながら成長してきた。終

戦直後に配給制度の民主化を求めてともに行動したときのことである。荷受け事業は阪神部（灘生協）と神戸部（神戸生協）に分かれ、統一行動をとれずにいた。どちらにも、連携して将来の日本の生協を築く、という理想はある。しかし現実には足並みが揃わず、相互批判もあった。

このとき涌井がとった行動は思いがけないものだった。

「溝を埋めるには、誰かが身を挺して架け橋の役目を果たさなければならぬ」

そう言って専務理事辞任を申し出たのだ。荷受け権の大元の取得機関であり、灘購買と神戸生協の連合会である兵庫県市街地購買組合連合会の常任になって、問題に体当たりで処していこうと決意したのである。

進退伺は当時の小泉組合長の説得で撤回することになったが、「明日の神戸のために、そして日本の生協のために」ふたつの生協に橋を架けたいとの思いは、涌井の胸の奥に熾火となって残ったのではないだろうか。

隣り合う水路のように離れたり近づいたりしながら歩んできた両生協だが、組合員の生活圏は戦後の市街地の拡大にともない、ひとつにまとまりつつあった。ヨーロッパ諸国の生協も日本の農業協同組合も合併を進めて、戦後の社会経済情勢に対応していた。昭和三〇年代半ばには高度経済成長を背景に、商品を安く大量に販売するスーパーマーケットが小売業界を席捲し始めており、生協陣営は組合員の暮らしを守るため、これに対抗できる力を付けなければならなかった。合併は成るべくして成ったと

言えるのかもしれない。

涌井は「合併がただ環境や情勢の変化に押されたものではなく、四〇年にも及ぶ両生協の歴史のなかで鍛え抜かれた協同組合の理想が根底にあったからだと思いたい」とあらためて、これが「事業会社の合併」ではなく「協同組合間の合併」であることを訴え、灘生協もこれに賛同している。

宮城では昭和四五年に東北大学生協のメンバーが宮城県民生協を設立するが、灘神戸生協は遠くに輝く星のような存在だった。事業運営の教科書であり、生協運動の先頭を行く旗手だった。宮城県民生協と宮城県学校生協の合併で「みやぎ生協」が誕生するのは、灘神戸生協が生まれてちょうど二〇年後のことである。

暫くはこの世界の中に生きぬいてゆく

涌井安太郎は六人きょうだいの長男で、四男の安夫とは一五歳の年齢差がある。

安夫は「兄貴の背中を見て育った。影響を受けたことは間違いない」と話す。その影響のひとつが「仙台弁護士協同組合」だろう。安夫が仙台弁護士会の会長だった昭和四七年、仙台弁護士会の弁護士全員を組合員にして設立した組合で、民主的な組織づくりを徹底した。四三年間で組合員数は九九名から三九四名に拡大、出資金も順調に増加しているという。

涌井はよく東京出張を利用して仙台まで足を伸ばし、きょうだいたちの家族と食事をとともにした。仙台より神戸に暮らした歲月の方が長いのに、東北訛りが抜けなかった。人に会えば必ず郷里を尋ね、同郷と知ると顔をほころばせた。

弟安夫はそんな兄を「年をとってからは、何かというかと仙台に来たがっていた。故郷に戻りたいという気持ちかどこかにあったんじゃないうか」と心境を慮る。

涌井は昭和四七年、『星をめざして わたしの協同組合運動』を上梓した際、陶淵明の「帰去来の辞」を引用して次のように謝辞を述べている。

「淵明はやがて 帰りなんいざ 田園は將に蕪れんとするに 胡んぞ帰らざる と 帰去来の辞を綴って俗世界から遠のいていますが 私は なお暫くはこの世界の中に 生きぬいてゆくことを志して居ります」

協同組合運動という星をひたすらめざした涌井に、望郷の念はあっても仙台へ帰るという選択はなかっただろう。家族とともに暮らした神戸で生涯を閉じたのは、一九九六（平成八）年、阪神・淡路大震災の翌年のことだった。

※扉写真提供／勅使河原安夫